

ベルトーフ 『子供のための絵本』 にみる  
「人間」とその文化 (1)

富 山 典 彦

## I

18世紀末から19世紀初頭にかけて、「子供のため」と銘打った絵本<sup>(1)</sup>がワイマル公国で順次刊行された。これらの絵本と、その絵本とは別に刊行された親と教師のための註釈書<sup>(2)</sup>が、成城大学図書館の貴重書庫に収められている。

これらの貴重書をもとに、すでに1本の拙論<sup>(3)</sup>を発表したが、20世紀前半のオーストリア文学を専門とする筆者にとって、それはもちろん容易なことではなかった。したがってこの拙論では、『子供のための絵本』の第1巻のみを取り上げ、そこに描かれた「自然」を明らかにしようと試みた。

『絵本』と銘打っているものの、そこに描かれている動物や植物は精緻な図像になっており、むしろ『図鑑』と称すべきものである。筆者自身、子供の頃に、『昆虫図鑑』『動物図鑑』『鳥類図鑑』『魚類図鑑』『貝類図鑑』『植物図鑑』『花卉図鑑』『天文図鑑』『工学図鑑』など<sup>(4)</sup>、何冊もの図鑑を買い与えられて、その美しい図像と簡単な説明文を読みながら、自分の周囲にはほとんど見当たらない広大な自然界に目を開き、心を躍らせたものである。

18世紀末から19世紀初めのワイマル公国で、最初はその公国のプリンスやプリンセスのために刊行され、彼らが成人したあとも次々と刊行され続けた『子供のための絵本』は、博物学が盛んだった時代にあって、子供たちのみならず、大人たちの興味も惹いたことであろう。実はこの絵本が刊行されていた頃、ワイマル公国には万能の天才と称され、イタリアで原植物 *Urpflanze* を発見したと言ったあのゲーテがいたのである。

その膨大な分量と内容に感嘆するほかないこの『子供のための絵本』であるが、そこに描かれている世界は実に多岐にわたっている。ありとあらゆる

図鑑をバラバラにして、そのページを適宜貼り合わせたような『子供のための図版』である。その第1巻から垣間見ることのできる「自然」を論じようとした拙論においてすでに指摘したことではあるが、その「自然」のなかに「人間」とその文化も織り込まれているのである。

本論では、この膨大な絵本を読み解くにあたって、前回とは少し視点をずらし、「人間」とその文化がどのように取り上げられ図像化されているのかについて考えてみたい。今回は、『子供のための絵本』の全巻を通観したうえで、該当箇所と思われるものはすべて選び出した。全体からすればごく一部にしか過ぎない該当箇所ではあるが、それでもかなりの分量であるとともに、「人間とその文化」という切り口で得られたものは、「自然」に負けず劣らず多岐にわたっている。

ということで、本論では、その一部を取り上げることにできなかった故に、拙論のタイトルにまた「(1)」という番号を振ることになった。筆者の力量不足を勘定に入れても、この絵本に描かれた世界は、筆者がかつて隅から隅まで愛読した図鑑などとは比較にならないほど広大かつ深遠である。「自然」と同様、この「人間とその文化」についても検討を続けることができればと願う次第である。

## II

「文化」をドイツ語では Kultur というが、これが「農耕」に由来する言葉であることは周知の事実である。『子供のための絵本』では、農業に関わる植物や動物などはすべて、「自然」と重ね合わせて描かれている。もちろん、水産業もそうであり、人間が自然環境に寄り添いながら生きてきたことを再確

認させている。

農業も水産業も、その地域の自然と深く関わりつつ、そこに生きる人間が、まさに生きるために自然からその果実を獲得するという意味では、自然に依存する傾向が強いと言える。かりにこの世界を自然と文化に二分割したとすると、農業と水産業は、そのいずれにも属するものである。

産業革命が起こる以前のワイマル公国では、これらの産業がどの程度のものであったのか、筆者の知識の範囲外ではあるが、ハプスブルク家のヨーゼフ二世が「帝国改革」の一環として農民に扮して農業を体験したのは、この絵本が出版された時期と重なっている。

この絵本では、農産物や水産物の図像とそれについての記述はあるが、農業や水産業そのものについての記述は見当たらない。貴族社会の子供たちがこの絵本の読者として想定されていたから、農業や水産業における「労働」という「人間」の活動については省かれたと理解できるだろうか。いや、この絵本そのものが、「人間」を取り巻く自然界のありとあらゆる事象を図像化し、それに対する博物学からの見解を子供たちに伝えるという明らかな目的を持っている以上、「労働」がこの絵本の対象になることは考えにくい。

それ故に、「自然」と対比される「芸術」について、この絵本ではほとんど取り上げられることはない。芸術作品は自然界にある事物でないことは当たり前だが、貴族社会にあっては日常的に目に触れるものであるから、この絵本に取り入れられることはなかったと考えていいだろう。

では、この絵本には、「人間とその文化」に関わるものとして、どのようなものが書かれているのだろうか。すでに拙論で指摘したことだが、この絵本の特徴は、一見バラバラに自然界の対象が並んでいることである。

本論を書くにあたって、筆者はこの絵本の全巻を通観し、「人間とその文

化」という枠組みに入れることが可能であると思われるものをすべてコピーした。当初の予測に反してそのコピーは、この絵本全体と比べるとほんの一部でしかないものの、相当の分量になり、それらをどのように整理して本論に使用すべきか、筆者を混乱させるものとなった。

一見バラバラな絵本の構成とはいえ、その編者にはそれなりの構想があり、ページの上部には「四足動物」とか「鳥類」とか「魚類」とかいう分類のためのキーワードが書かれている。自然界の動植物については、整備された分類学が存在しているから、それを頼りにこの絵本のページを組み替えさえすれば、「動物図鑑」とか「鳥類図鑑」というものが、膨大な分量になったとしてもできあがることは間違いない。

しかし、人間が創りあげた「文化」はそういうわけにはいかない。筆者がコピーしたページの過半数は、Vermischte Gegenstände という枠に入れられているのである。それはもちろん、人間の作り出した「文化」の多様性によるものであり、それらの「さまざまな事物」を丁寧に分類していけば、この絵本の描く「文化」の輪郭が姿を現すことであろう。

ごく一例だけを挙げるとすれば、この絵本が出版された時代のロンドンの建築物やロシアの建築物などがこの絵本に登場する。ワイマル共和国からすれば、ロンドンもロシアも遠い世界である。そこにどのような「文化」が存在しているのかについて、建築物、とくに教会建築などはその典型的な例となる。

それならば、世界各地の建築物を挙げることでこの項目が満たされるかという、そうではない。人間は、望遠鏡や顕微鏡などを発明し、それによって、肉眼で見える自然とは別の「自然」を発見した。この絵本では、天体観測のための望遠鏡<sup>5)</sup> そのものは紹介されているが、それによって見える宇宙

については語られていない。そのかわり、顕微鏡で見える微生物<sup>(6)</sup>は、分量としてはごくわずかではあるが、この絵本に描かれている。微生物という観察対象は、人間の生み出したものではなく、自然界に存在するものである。しかし、顕微鏡という「道具」がなければ、われわれはその存在に気付くことがないであろう。また、同じ顕微鏡を用いて探究する対象として、生物ではなく金属の結晶<sup>(7)</sup>もある。

その存在に気付くことがなければ、それは存在していないことと同じになる。そう考えると、微生物のような「自然」は同時に、人間の「文化」の産物でもある、ということになる。おそらくそれ故に、顕微鏡による微生物の画像は、人間の「文化」の一部として「さまざまな事物」に分類されたのである。

「さまざまな事物」についての考察は、「(2)」以降の論文に譲ることとして、本論では、「人間」を表すものとして特徴的な衣装について管見してみたい。

### Ⅲ

すでに拙論で取り上げたことではあるが、第一巻には、世界各地の「人間」の図像が描かれている。順に挙げると、「ヨーロッパの人々」<sup>(8)</sup>「アジアの人々」<sup>(9)</sup>「アフリカの人々」<sup>(10)</sup>「アメリカの人々」<sup>(11)</sup>「オーストラリアの人々」<sup>(12)</sup>となり、五大陸に住む人々がそれぞれの衣装を着た姿が描かれ、紹介されている。

最初にヨーロッパの人々が登場するのは当たり前と言えるが、図像に付けられている番号の順を追っていくと、1番と2番はフランス人の男女、3番と

4番はイギリス人の男女である。それぞれ、華麗な衣装を着ていて、とくにフランス人の女性はあのマリー＝アントワネットを彷彿とさせる。イギリス人の男女はそれぞれステッキを持ち、男性だけではなく女性も山高帽をかぶっている。フランス人よりイギリス人の方が大柄に描かれているのが目に付く。

現在のイギリスでも、スコットランド独立の動きが報じられているが、5番目の図像は、軍服を着たスコットランド人の男性である。もちろん手には身長とほぼ同じ長さの銃剣を持ち、古代ローマ人がイングランドまでは征服したが、スコットランドの手前で引き返したというエピソードを思い出させる。

ヨーロッパの人々というタイトルなのに、ドイツもイタリアもここには登場しない。ワイマル公国は、神聖ローマ帝国崩壊後はドイツ連邦に属することになったが、「ドイツ」は身近すぎるために代表的な衣装をここに挙げるができなかったのだろう。イタリアはまだ統一されておらず、現在のイタリアにおいてさえ、「イタリア人」という意識よりは「トスカナ人」や「ナポリ人」という意識が先行するが故に、やはり統一的な衣装を着せられなかったに違いない。

また、現在数多く存在する東欧諸国は、ここには一切紹介されていない。ロシアについては、この絵本のかなり後に、「さまざまな対象」の一環として紹介されている。18世紀末から19世紀初頭という時代がここに反映されているのである。

それに対して、6番と7番には、なんとトルコ人の男女が描かれている。ウィーン会議を主催したメッテルニヒは、「ウィーンから東はアジアである」という有名な言葉を残しているが、われわれの地理の常識でもトルコはアジアである。もちろんトルコは、歴史的に二度にわたってウィーンを包囲した

から、ピレネー山脈の彼方のスペインよりはずっと「ドイツ」に近い。

さらに驚くべきことに、8番と9番はサモワール人の男女で、ワイマル公国の子供たちにとっても、同じヨーロッパと認識することはあり得ないだろう。ヨーロッパの最北端に住む人々ということなので、全身を防寒服に包み、手には原始的な弓を持っている。この絵本を開いた子供たちは、貴族社会のフランス人とイギリス人と同じページに、普段は目にするもののないこれらの小柄な人々が登場することで、人間もまた「博物学」の対象になるものだと感じたことだろう。

アジアやアフリカの人々のページの図像は、世界各地に存在している「人間」の多様性を印象づける。トルコ人が「ヨーロッパの人々」に入れられている一方、「アジアの人々」に日本人は当然のこととして、ヨーロッパ全体よりも巨大な帝国に住む中国人が入っていないのは興味深い。ロシアと同じように中国も、それぞれ別のページに登場することになることの前兆である。

わが国では「欧米」と称して、アメリカとヨーロッパを一括りにするのが一般的だが、この絵本では、「アメリカの人々」はアジアとアフリカの次に紹介されている。面白いことに、グリーンランド人が1番で登場する。かつて「インディアン」と呼ばれた人々が、現在は「ネイティブ・アメリカン」としてアメリカ合衆国に暮らしているが、これは3番の「ヴァージニア人」であろう。また、5番には「火の国の人々」と書かれた男女が登場するが、2番の「キャプテン・クックの三番目の探検旅行で見つけられた人々」に属する「ウナラッシュク人」など、謎の人々が紹介されている。

オーストラリアも現在ではかなりヨーロッパ化が進んでいるはずだが、この絵本ではもちろん、原住民が登場する。面白いのは、4種類の人々のなかで最も原住民らしい4番の、ほとんど裸で長い槍と剣と盾を持った人々には、



「新オランダ人」という名前が付けられていることである。

世界各地には、姿形も衣装も言語も武器も風俗習慣も、もちろんその文化も歴史も異なる多くの「人間」が「棲息」している。ヨーロッパ人がいわゆる大航海をしなかったとすれば、これらの「人間」の大部分は他の「人間」にその存在を知られることなどなかったであろう。ドイツ諸邦は残念ながら、その大航海には乗り遅れてしまったものの、博物学においては、フンボルト兄弟のような業績を残した人たちが存在する。この絵本の精緻な図像を見るにつけても、その広大な世界を垣間見て、今さらながら驚嘆するばかりである。

第一巻に登場する「人間」は、独特の衣装を身に纏った、これら五大陸の人々である。五大陸の人々が連続した5ページで紹介されているが、「衣装」のジャンルはひとまずこれで終わる。逆に考えれば、五大陸がすでに登場したのだから、「衣装」のジャンルはこれで終わりということになりそうだが、この膨大かつ精緻な『子供のための絵本』は、そのような偏狭な理解をはるかに超えている。

#### IV

第二巻から第四巻までは、残念ながらその特異な衣装を身に纏った「人間」は描かれていない。第一巻のほんのごく一部を眺めただけでも、これほどさまざまな対象が登場しているのだから、第二巻から第四巻までに何が描かれ、何が語られているのか、それは「(2)」以降の論文に譲るしかない。

第五巻になって、ようやく「人間」が登場する。「ヨーロッパの人々」からスペインは省かれていたが、「スペイン人の闘牛」<sup>(13)</sup>が第五巻に登場する。ス

ペインと言えば闘牛が有名なことは、わが国でもよく知られているし、メリメの原作をビゼーがオペラにした『カルメン』を思い出すまでもなく、闘牛士たちは華麗な衣装を身に纏っている。このページには3点の図像が描かれている。馬に乗った闘牛士が槍で牛を刺している図、次に妙な形をしたナイフを命がけで牛の背中に何本も突き刺している図、最後に赤いマントで呼び寄せた牛の背中に留目の剣を刺そうとしている、『カルメン』でいうとエスカミーリョの図である。もっともこれは、「衣装」のジャンルではなく「さまざまな事物」のジャンルに分類されている。「人間」とその文化は、自然界の動植物とは違って、一つのジャンルに収まりきれない多様性を持っていることが、子供たちに示されている。

エジプト人の衣装は、すでに「アフリカの人々」で登場しているが、第五巻になって、これもまた「さまざまな事物」のジャンルのなかで「エジプト人の衣装」<sup>(14)</sup>として、5点の図像が描かれている。第一巻のエジプト人は王侯貴族の衣装を身に纏った一組の男女だが、ここでは、奴隷の女性と向かい合う貴族の女性や、農民の家族、召使いの家族など、階層分けが行われている。当時のフランスでは人間の自由と平等が叫ばれたとはいえ、いまだ身分制社会が強く生き残っていたヨーロッパということを抜きにしても、社会階層による衣装の違いを、ワイマル公国の貴族の子供たちも認識するのである。

ヨーロッパにおける身分ということ言えば、すでにその戦闘員としての位置は失っていたものの、「騎士」の姿がワイマル公国の子供たちの目に、輝かしく映ったことであろう。ハプスブルク家の皇帝たちの肖像画や彫刻に、ブルゴーニュ家から継いだ金羊毛騎士団の首輪が描かれていることからしても、また、現在もマルタ騎士団が「国土のない国家」を維持していることからしても、ヨーロッパの人々、とりわけ貴族社会にとって重要なことである。

まず、「騎士団」<sup>(15)</sup>として4枚の図像が描かれているが、最初の2枚は「テンプル騎士団」、あとの2枚は「ヨハネス騎士団」である。その説明は、年号も含めてかなり詳しく述べられているが、ここでは割愛することにする。

次のページは「さまざまな騎士団」<sup>(16)</sup>で、1番が「ドイツ騎士団の騎士」、2番が「金羊毛騎士団の騎士」、3番が「聖シュテファンの騎士」、4番が「聖フーベルトゥスの騎士」である。このあたりはわが国でもかなり知られていると思うが、このページから少し飛んだところにまた2番目の「さまざまな騎士団」<sup>(17)</sup>において、派手な衣装を身に纏った4人の騎士たちが描かれている。1番が「黒騎士団の騎士」、2番が「アンドレアス騎士団の騎士」、3番が「セラフィヌス騎士団の騎士」、4番が「白象の騎士」である。第五巻に登場する「人間」は以上である。

南ドイツからオーストリアやスイス、さらに東欧にかけて、現在でもその地域独特の民族衣装があり、その模造品が土産店にも置かれている。この絵本ではそのなかで、「スイスの衣装」<sup>(18)</sup>だけが紹介されている。6人のスイスの男女が、第六巻の冒頭に登場するのである。1番は「ウンターヴァルデンの男性」、2番は「ベルンの農民の女性」、3番は「エンメンタールの牛飼いの男性」、4番と5番は「エントリブーフの少女と少年」、5番は「ジュネーブの狩人」と、地域と職業が散りばめられている。

「アジアの人々」のなかに「東インドの衣装」はあったが、第六巻には、「インドの衣装」<sup>(19)</sup>として、3人の男性と1台の牛車、それに「ハッケリー」と書かれた収穫を祝う山車が紹介されている。衣装だけではないためか、これらは「さまざまな事物」のジャンルに入れられている。興味深いのは、1番の「パンドラ、あるいはヒンドゥー教の托鉢僧」と2番の「ファキアー」<sup>(20)</sup>という、宗教の異なる托鉢僧が並んでいることである。衣装の違いは、同時

に信仰の違いでもあり、このページが「さまざまな事物」のジャンルに入れられているのは、衣装という見かけの下に隠された、キリスト教とはまったく異なるインドの宗教がほんの少し語られているからだろう。

さらに第六巻では、「ペルーのインカ人」<sup>(21)</sup>の男女が紹介されている。それぞれの頭には王冠が載せられているから、インカ帝国の皇帝と皇帝妃であろう。第一巻の「アメリカの人々」からは除外されて、すでに滅亡した南米の大帝国について、ここでほんの少し語られているのである。

第七巻では、まず「ペルシャの衣装」<sup>(22)</sup>が紹介されている。これも、「アジアの人々」からから独立して、2人の男性と2人の女性、合計4点の図像が描かれている。ここに描かれたのはいわゆる中流階層の人々である。

ヨーロッパの言語のほとんどはインド=ヨーロッパ語族だが、その言語分布は、バルカン半島からトルコ、ペルシャ、そしてインドへと、かつてアレキサンダー大王が軍を進めた道と重なっている。第六巻のインドから、第七巻のペルシャを経て、第七巻に10ページにもわたって「トルコの国民的衣装」<sup>(23)</sup>が登場する。「このページとそれに続くページで、トルコから興味深い叙述をするが、それはその住民の風俗習慣や生活の仕方を知るためである」と前書きがされている。この10ページに書かれていることは、それだけでも論文を1本書ける内容であり、本論では、日本人の衣装についての記述にエネルギーを割きたいので、とりあえずトルコについては先に譲ることにする。

## V

「日本人の衣装」<sup>(24)</sup>が登場するのは、ようやく第八巻になってからのことである。ここには、複数の人々が描かれた2枚の図像がある。筆者の子供の頃

には鯨肉をよく食べたが、この絵本の最初に登場する日本人はなんと、肩に天秤棒を担いだ「鯨売りの商人」なのである。この絵本が出版された頃の日本は江戸時代末期ということになるが、ここに描かれた日本人たちはもちろん、今のわれわれとはさまざまな点で異なっている。いろいろな行商人がいたことは確かだが、そのなかで鯨を売り歩く行商人が最初に登場するのは、とても面白い。

その隣には、紋の付いた羽織を着た後ろ向きの男性が小さく描かれているが、これは町方の役人である。「ヨーロッパの人々」の最初にフランスとイギリスの貴族たちが描かれていたことを思うと、ヨーロッパ人に認識されていた日本の特異な姿がよくわかる。

その隣は、赤子を背負った女性なのだが、後ろ向きと前向きの2つの姿で登場する。もちろん髪には何本もの櫛がささっている。この女性の前には、鹽や敷き藁など、ヨーロッパには存在しない道具が置かれている。そして、前向きの女性が見ているのは、餅つきの杵の先である。男性が襷を掛け腕まくりして、杵で餅をついている。

下の図の最初の男性は、上の図と同じように肩に天秤棒を担いでいるが、こちらは時代劇でよく見る飛脚である。もちろん、Hikyaku などという言葉が記載されているはずもなく、「いくつかの荷物と一足の藁の靴を、肩にかけた棒で運んでいる人」となり、もちろん草鞋、すなわち Waraji も存在しない。

現在は Tofu というドイツ語が存在しているが、かつては Bohnenkäse と呼んでいたことを思うと、この絵本の編者たちが、相当の苦労を強いられたことは確かである。

飛脚の隣は「日本の船乗り」とあるが、この図からこれが船乗りであることは、少なくとも筆者には読み取れない。ヨーロッパの遠洋航海の船員とは

違って、日本の船乗りとは、川下りの小舟に乗った人たちのことを指しているのであろう。

その隣には女性が立っているが、上の図の女性がそれほど美しくない着物を着ているのとは対照的に、下の図の女性は、裾に模様の入った紋の付いた着物を着て、手には扇子を持っている。おそらく芸者なのだろうが、ドイツ語の説明では、「まだ結婚していない日本の婦人」となっている。「フジヤマ、ゲイシャ、ハラキリ」が、日本を表すステレオタイプになるのは、もう少し先のことなのか、それとも、子供のための絵本だからなのか、一考を要する。

その隣には「金持ちの子供を肩に抱いている召使い」が立っている。子供の頭は、肩に担がれているからその召使いの頭よりずっと上にあり、そのうえ、その子供の着ている衣装は、なんと召使いの足下まで垂れ下がっている。どうしてそんなに長い着物を着せているのか謎だが、もしかしたらこれは、日本の着物の帯を描いているのではないだろうか。身の丈よりも長い帯をどのように使うのか理解していないヨーロッパの人たちは、こんなふうにするものだと誤解していたのかもしれない。たしかに、ドイツ語の説明では、「子供の長い、装飾を施したコート」とあり、さらに、「その赤い色は、とても健康的だと思われている」と付け加えられている。

その隣は、蓑を着た男性が立っていて、「傘の代わりに藁の帽子、レインコートの代わりに藁のマント」と説明がついている。その隣に立っているのは、「冬の衣装を着た普通の市民」とある。

「日本人の衣装」はたった1ページだけだが、武士や公家の衣装については、まったく触れられていない。おそらくそれは、日本に来た外国人が、庶民の姿は容易に見ることができるが、江戸城内の武士や大奥の女性たち、ましてや都の公家の姿を見る機会がほとんど与えられていなかったからである

う。「日本人の衣装」を見た当時のワイマル公国の子供たちは、日本をどう思うかで眺めたであろうか。

庶民の姿しかみることのできない日本人に対して、「中国人の衣装」<sup>(25)</sup>は、順序としては日本の後に置かれているものの、「中国の皇帝」が1番に登場する。この絵本に描かれた日本人の衣装はともかくとして、その顔にはそれほど違和感がなかったが、中国の人たちの顔を見ると、細くつり上がった目が真っ先に目に飛び込んでくる。

筆者の子供の頃、「上がり目、下がり目、ぐるっと回してトットの目」という、目を使った遊びがあった。後に知ったことだが、これはアジア人の顔つきを笑いものにする差別表現であった。その「上がり目」こそがまさに中国人ということになる。

旧約聖書には世界創造のことが書かれ、アブラハムやヤコブなど、その後登場する人たちの生きた年数がきちんと記載されているから、その世界がいつ始まったかを計算することができる。ヨーロッパ人が中国と出会ったとき、その歴史書から、ヨーロッパでの世界創造以前に中国が存在したことに戸惑ったという逸話がある。この絵本に描かれたトルコのスルタンと中国の皇帝を比較してみると、明らかに前者の方が華麗な衣装を着ている。もちろん、第一巻に登場するフランスとイギリスの貴族たちはさらに華麗である。その理由についての推測は、今さら述べるまでもないであろう。

第八巻にはさらに、「アイスランド人の衣装」<sup>(26)</sup>が掲載されているが、これには5人の男女と1人の子供が描かれた図のほかに、「レイキャビクの風景」の図があるので、「衣装」ではなく「さまざまな事物」のジャンルに入れられている。

アイスランドといえば、ワーグナーの楽劇『ニーベルンゲンの指輪』に登

場する女王ブリュンヒルデを思い出すが、もともと古代ゲルマンの神話にあり、中世には作者未詳の叙事詩になっている。女王ブリュンヒルデは求婚者に対して、自分に勝ったらその求婚に応じるが、自分に負けたら死が待っているという強者である。そのせいか、ここに描かれている女性たちは華麗な衣装を身に纏っているが、男性たちは質素な出で立ちである。

第九巻には「ジャワ人の衣装」<sup>(27)</sup>というページがあるが、これも「衣装」ではなく「さまざまな対象」というジャンルに入れられている。

民族衣装としてはスイスのそれがすでに登場しているが、第十巻には「モンテネグロ、アルバニア、ダルマチアの民族衣装を着た住民」<sup>(28)</sup>が登場する。スイスは独立国家となったが、モンテネグロもアルバニアもダルマチアも、この時点では国家となっていない。歴史的にみて、他の民族の国家のなかに組み込まれつつ、自分たちの自己同一性の証として、それぞれの言語とそれぞれの民族衣装を持っていたと考えられる。

これらの地域のかなりの部分をかなりの期間にわたって支配していたハプスブルク家の本拠地であったオーストリアでは、現在も各地域独特の民族衣装が存在している。ほんのわずかの形の違いや色や模様の違いで、それがどの地域のものであるのかがわかるのとこのことであるが、この絵本の「衣装」のジャンルの最後に、第一次世界大戦後にユーゴスラビアとして包括的に国家となった地域の民族衣装が紹介されているのは興味深い。

本論では、『子供のための絵本』という膨大な図鑑のほんのごく一部を取り上げて、「衣装」を通じて、この絵本を繙く子供たちの世界理解を辿ってみようと試みた。あまりにも広大な「自然」のなかから、「人間」という、哺乳動物のなかのほんの一種のみを拾い出そうとしたのだが、自然界における種としては「ホモ・サピエンス」の一種でしかない「人間」ではあるが、その残



してきた歴史や事物は、あまりにも巨大である。

本論において、「衣装」のみを取り上げることしかできなかったが、次は「古代」について考察したい。古代こそが、人間の築き上げた「文化」を、目に見える遺物として残しているからである。

もちろん、この絵本の「さまざまな事物」というジャンルに入れられたことは、それでとうてい尽きるものではない。筆者のこれまでの文学研究とはまったく違う世界が、この絵本を通して目の前に開けようとしているこの現実を、どう受け止めていいのか、まだまだ未知数でしかない。

(了)

本論は、2018・19年度成城大学教員特別研究助成により公開されるものである。

#### 註

- (1) Bilderbuch für Kinder : enthaltend eine angenehme Sammlung von Thieren, Pflanzen, Blumen, Früchten, Mineralien, Trachten und allerhand andern unterrichtenden Gegenständen aus dem Reiche der Natur, der Künste und Wissenschaften : alle nach den besten Originalen gewählt, gestochen, und mit einer kurzen wissenschaftlichen, und den Vestandes-Kräften eines Kindes angemessenen Erklärung begleitet von F. J. Bertuch. Weimar : In dem privil. Industrie-Comptoir, 1794(?)–1830.
- (2) L.Ph.Funke : Ausführlicher Text zu Bertuchs Bilderbuche für Kinder : Ein Commentar für Eltern und Lehrer, welche sich jenes Werks bei dem Unterricht ihrer Kinder und Schüler bedienen wollen. Weimar : Im Verlage des Indurtrie-Comptoirs, 1798–1833.
- (3) 「ベルトーフ『子供のための絵本』に描かれた自然 (1) ——19世紀前半のワイマル公国における幼児教育についての一考察」(『ヨーロッパ文化研究』第38集、2018年3月、153頁～175頁)。
- (4) ここで『昆虫図鑑』を最初に挙げたのは、個人的理由ではあるが、筆者がもっとも熱心に読み耽ったのがこの図鑑である。
- (5) Bd.III. No.6.

- (6) Bd.II. No.98.
- (7) Bd.V. No.94.
- (8) Bd.I. No.76.
- (9) Bd.I. No.77.
- (10) Bd.I. No.78.
- (11) Bd.I. No.79.
- (12) Bd.I. No.80.
- (13) Bd.V. No.10.
- (14) Bd.V. No.12.
- (15) Bd.V. No.61.
- (16) Bd.V. No.62.
- (17) Bd.V. No.66.
- (18) Bd.VI. No.1.
- (19) Bd.VI. No.16.
- (20) この絵本の説明によれば、ブラフマン教かつイスラム教を信仰する托鉢僧で、魔術師であり真理を述べる人とある。図像は、ほとんど裸体で、芦の葉のような細かい葉に何かを書いている。
- (21) Bd.VI. No.82.
- (22) Bd.VII. No.7.
- (23) Bd.VII. No.71.-No.80.
- (24) Bd.VIII. No.10.
- (25) Bd.VIII. No.92.
- (26) Bd.VIII. No.52.
- (27) Bd.IX. No.54.
- (28) Bd.X. No.16.